

---

# 約束

こつぶ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束

### 【Nコード】

N5579L

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

『約束、ね』

遠い日に出された姉との指きり。姉が死んでしまった今、それは一生叶うことのない約束だと彼女は信じていた。けれど……。約束は今、果たされる。新たな約束を携えて。灰原哀贗冒サイトCandlight（管理人 どん ぐりこ&副創作人 こつぶ）閉鎖に伴い、移行作品。宮野の日投稿作品でもあり、宮野姉妹、赤井が登場。花嫁の相手は各自想像してください。

## ブローグ

カランコロンとチャペルに響き渡る鐘の音。

心に染み入るパイプオルガンの奏でるウェディングマーチ。

清めのために白い花びらを撒くフラワーガール。

そうしてその向こうには、司式を執り行ってくれる牧師と、花嫁を待つ彼がいて――。

全てが目の前にあること。

そうして花嫁は白いドレスを身に纏った娘の晴れ姿に、既に涙ぐむ、2人めの年老いた父と共にバージンロードを歩く。

通路の脇で参列者の『おめでとっ』の声と、シャッターの切る音。ばしゃり。

数々のシャッター音の中で、確かに聴こえたその懐かしい音を、彼女は耳聡く聞き分け、反応した。

間違えるはずもない。他のデジタルな音とは明らかに違う。けれど、たとえその全てがアナログなものだとしても、その音を聞き分けることができると自信は彼女にはあったから――。

そうしてさつと振り返る。

案の定、そこには彼がいて。

ファインダー越しに自分を見つめ。・・・口元をにやりと笑わせ  
て。

その向こうに、彼女の姉の姿が見えた気がした。

『約束、ね』

あのときの言葉が頭に響き渡る。  
まだ始まったばかりだというのに。  
彼を見た瞬間。『姉』を見た瞬間。

-  
-  
-花嫁は、泣いた。

組織が壊滅して数ヶ月が経っていた。

今では解毒剤の研究の最終段階まで来ていて、その被験者の一人になる彼に対して少しずつその薬の副作用に対する抗体を作るために何度か地下室に通わせている。無論それは一部の人の間だけの秘密のことだけれども。

そうして今日がその受診日。

しかし時間になっても肝心の彼がまだ現れず、灰原哀は一人リビングのソファに座り、はあ、と小さく溜息をついた。

「まあ、大体解ってたけどね・・・」

彼女が今、見つめているのはケータイの中の彼の、江戸川コナンの謝罪メール。

これが届いたのは1時間も前のことだ。けれども哀はそれを何度も何度も開いては憂いた顔で画面を睨んでいた。

『わりい。事件に巻き込まれたから、ちょっと遅くなる。マジゴメンな?』

「まったく・・・どれだけ待てばいいのよ。あと1時間経っても帰ってこなかったら怒るからね」

何度目かの溜息の後、呟いたその言葉。

絵文字も交えたその文体に、緊張感はまるで感じられない。

彼はこの薬の大切さを少しも判っていない。それは『工藤新一』になる準備として必要不可欠なもので、時間、量だつてきちんと決めて彼に提示してある。少しでもずれれば作られる抗体の量や質にも影響がないとも限らない。

この過ぎていく一分一秒さえもどかしいのだ。

博士も出かけてたった一人になったこの部屋で、志保は無意識に指の腹でとんとんとテーブルを叩き始めた時だった。

ピンポン。

待ち人来たり。

まるで籠が外れたようにベルの音に反応し、勢いもよく音の方に振り返ると大きく深い溜息をついた。先ほどまでとは質が明らかに違う溜息。そうして口元を緩ませゆっくりとソファから立ち上がると、玄関まで軽やかな足取りで行き、相手を確かめることなくすんなりとドアノブを開けた。

「よかった。ギリギリ時間セーフよ？あなたにしては頑張ったじやな・・・」

緩んだ口元が、その目の前の人物を見て、一瞬のうちに凍りつく。

そこにいるのは彼女が待ち望んでいた、今ここにいたくちやいけない『彼』ではなくて、自分にとっては、例えばいくら時間をもらったとしても、きっと少しも予想にできなかった相手――。

「・・・あなた」

チェーンの向こうにいる人物は志保が、ドアを開けて最初に口にしたその言葉と、そうして自分の姿を認めたときの戸惑いだだけの表情を見て全てを悟ったのか、一瞬苦笑いを浮かべた。

「今日はこの時間にはここにいと聞いてきたのだが・・・その様子じゃ彼はまだ見えていないようだね。ちよつと早かったかな」

「え・・・？」

「昨日、ボウヤに頼まれ事をしていてね、それを直接渡すためにやってきたんだ」

江戸川コナン「工藤新一だとは知っていて、しかし未だに彼を『ボウヤ』と呼び、またコナンもその人物から、そう呼ばれ続けるのを許している相手。

疑っていたときもあったようだが、今では心の底から、コナンが無条件で信頼している相手。

そうしてFBIの有能な捜査員で、組織に探りを入れる目的で、『諸星大』という偽名で無防備な姉に近づき、利用した相手。

組織潜入時代には『ライ』というコードネームで呼ばれていた相手。

そこにいたのは誰あろう『赤井秀一』、その人だった。



赤井秀一と話すのは心の準備が要った。

リビングに彼を通し、コーヒーを淹れるためにキッチンへと向かう。

そうしてインスタントコーヒーの瓶を棚から出すその手は震えていた。

その理由は勿論自分でも解っていた。

彼が、コナンのいう『赤井さん』であり、志保やジンたちにしてみればコードネーム『ライ』であり、姉にとっては『諸星大』という最愛の人。それが1本の線で繋がれていることに気づいてしまったのは、組織壊滅の後だった。

自分が以前抱いていた、見えない何かの存在は全て『赤井秀一』のものだというのも、わかった。

けれども、全てがわかることで、その人物に出会うことで別の感情が生まれてきて、手放しで歓迎するわけにはいかなかった。

いくらその人が工藤さんの信頼する相手の一人でも、自分まで心を許すわけにはいかなかった。

なぜなら、『赤井』と呼ばれるこの男は、諸星大として姉の恋人であったが、実は私・・・最終的に組織に近づくために姉を利用したという事を、組織から聞かされて知っていたから。

だから、姉の死を知ったとき、ジンやウォツカを憎む気持ちと同時に、姉を裏切り、殺される原因を作った行方知れずだがまたFBIとして活動しているはずの彼を恨み、最終的に組織とコネクションを持てる位置にいた自分を呪ったのだ。

組織から離れ、時が経ちその中でいろいろ考えることで、やはり彼を責めるべきではない、と思った。あの潜入捜査は、FBIに託って組織を捕まえるための重要な任務だということも理解した。けれども、一生会うことはないと思っていたし、会ってはいけなかった。は思っていた。

会ったら、頭ではわかっていても情が支配し、沢山の罵声をぶつけるかもしれない思っていた。

けれども壊滅後、ジョディや周りのFBIの人たちが、推測することしかできないけれど、彼がどんなにか彼女を愛していて、姉が亡くなってどれほど落ち込んでいたのか。そして彼がFBIだとばれてしまった一件のこと等事細かに教えてくれてから少しずつ、少しずつ楽になったのに。

大勢居る中なら彼と一緒にいても大丈夫だとううやく思えることができたのに。

玄関を開けて彼を見た瞬間、動揺し、緊張してしまった。

開けっぴろげられた扉が急激に閉まる時のように、警戒心が溢れるほどに沸いてきた。

2人で話すということは、初めてだ。それが自分に用がなく、話す必要が少しもなかったとしても、同じ空間に2人だけにいるだけで、拒絶反応に似た、強い何かを感じていた。

恨んではいないと思っていた。

ただ、頭ではわかっていても、心のどこかで100%許せてはいないのかもしれない。

どんなに周囲が彼を評価しても、どんなに姉と心底愛し合っていたとしても、どんなに姉が若しかしたら彼の正体を知っていたとしても、まだコナンやFBIのように彼を慕い、信頼しあうこと、頼ったり冗談を言ったりすることは、多分一生、ないかもしれない。

それでもなんとか笑顔を作る練習をする。彼は、悪くない。悪くない。そう自分に言い聞かせる。

震える指先でインスタントコーヒーにお湯を注ぎ、お菓子を添えてリビングに戻ると、赤井がテレビの上に置かれたそれを手にとつ

て見つめていた。いや、目が離せない、というか。じつと、それを凝視していて。少しだけ、穏やかな表情に変わっていて。

そうしてそれを手にとっていた彼を見た瞬間、理解する。今、彼が何を考えているのか。固まっていた表情が、ほんの少し、綻んだ。ほんの少し、ただけだけ。

「・・・懐かしい？」

その言葉に、はっと我に返ったように、彼が振り返り、宙を見る。そうして、元の彼のクールな表情に戻り、視線を下にゆつくりと移した。

彼が手にしていたものは、ライカのカメラ。デジタルカメラではない、アナログの。昭和の匂いを髣髴させたヴィンテージなカメラ。そしてそれは、志保と姉の、そして姉と彼の思い出の、品。

「ああ・・・。やはり君が、持っていたんだな」

微かに掠れた声で言ったその言葉に対して、志保も表情を崩さずに小さく頷いた。

3年前、姉がまだ生きていたときに、組織に指定されていつも待ち合わせに使う喫茶店で、姉が自分とした約束を、忘れることはし

なかった。

忘れるわけにはいかなかった。  
忘れる筈がなかったのだ。

大切な思い出。

大切な約束。

きつちりと絡められた指と指。

あの時の、茶目っ気たつぶりで、とっても綺麗に笑った姉の顔。

一分、一秒でも忘れたくなくて。  
けれども、それは。

果たされることは、なかった。

今でも聴こえる、あの優しい言葉と、目の前に出された姉のモデルのような白くて細い、小指。

『約束、ね』

3年前、指と指を絡めて成された約束。しっかりと繋がれた指と指の感触。  
戸惑う私を前に、してやったりという表情で嬉しそうに笑うあのときのおねえちゃんの表情。

あの日のことは、忘れない。  
きっと、永遠に。

「何、どうしたの？」

いつもの喫茶店、いつもの席で、私はお気に入りのチェリーパイにフォークをさくりと刺しながら、唐突に姉が袋から取り出したそれを見て、思わず訊ねずにはいられなかった。

姉の掌に包まれて、存在感をアピールするそれは、デジタル化が蔓延する中、滅多に見られなくなったというアナログ式のカメラ。

それは姉が大学に入学して初めてのバイトの給料で買ったというライカのレンジファインダー・カメラであり、姉がよくそれを持つて外へ行き、友達、恋人、旅行先の風景、身近な町並み……。そんな思い出を全て映し出した大切な品だということが自分にもわかっていった。話には聞いていたし、自分も幾度か姉が町や人、犬を撮っている姿を横で見てきたし、自分自身何度も被写体になったことだってあった。けれど、そんなカメラを店内でまさか突然取り出すとは思わなかったから、驚いてしまったのだ。

綺麗に磨かれたそれは、勿論、レンズに曇り一つもないし、漆黒のボディはピカピカに輝いている。  
まるで新品のものであるかのように。

「まさかそれで店内や店の外を撮ろうなんてするんじゃないでしょうね。それこそおねえちゃん、ヤツらに狙われるわよ……」

「フフ。まさか……。違うわよ。これをあなたにあげようと思っ  
って持ってきたの」

「……え？」

驚き、思わず呟いたその表情に、姉は楽しそうにコロコロと笑っていた。

「あげる、つて。それを？」

「そうよ？」

「・・・何？新しいお気に入りカメラを見つけたから？」

「・・・ああ、それもいいわね・・・」

「『それもいい』つて・・・」

あつけらかと答える姉に対して、私は呆れと動揺で言葉が出なかった。

姉が一体何を考えているのか、思考を何度も巡らせてみても解らなかった。

大体自分は姉にカメラを欲しいなんて今まで一度も言ったことなんてなかったのに。

それにそれは姉が一番大切にしていた品じゃなかったか。

数々の思い出がこめられた姉だけの宝物のようなものではなかったか。

理解不能、という表情の私を見て、姉はクスクスと僅かに声を立てておかしそうに笑った。

「そんな警戒しないでよ。おねえちゃんの、とっても素敵なアイディアなんだからv」

「アイディアって・・・」

「あなた、最近になって特に研究研究つて、組織の研究所に缶詰で、なかなか外へ出られなかったじゃない。だから、私は志保、あなたにこれをあげたの」

「え？」

いつのまにか、姉の目は真剣なものに変わっていて、じっと私を見つめていた。

吸い込まれそうな、透明な蒼色をしたその瞳に、私は一瞬ドキリ



と心臓が高鳴らせる。

「そうしたら少しでも外へ出られるかなって思ってた。知ってる？このファインダー越しに見る世界は、瞳に映されたレンズ越しに見える世界と全然違うのよ？人も、鳥も、街も、緑も、みんなみんな違うの。そして一つ一つカメラにも表情あつて、放っておけば機嫌を損ねるし、大切にすれば素敵な写真にしてくれるし……。とても奥の深いもののよ、だから……」

「じゃあ……」

そうカメラの素晴らしさを一生懸命に語る姉の話に咄嗟に遮り、私は自然と自嘲の笑みを浮かべていた。

「じゃあ余計にもらえないわ、そんなの……。私はおねえちゃんとは違って、たとえ外へ出たくても、出させてはくれないもの……。そんな大切なカメラを貰って、外へ行こうとしても書類に何かを書いて許可が降りるまで待たなくちゃいけない。今行きたいと思っても、許可をもらえるのは早くて3日後……。カメラのために、そんなめんどくさいことはできないわ。第一、カメラの操作もわからないし」

「じゃあ、おねえちゃんが教えてあげるから……。それ、毎回持つてきなさい……。今日からそれ、志保。あなたのものだから」

どうしてこう頑固でわからずやなのだろう。それはあなたも同じ、と言いつ返される気持ちもどこかであつたけれど、少しイラッとして私は思わず言い返していた。

「だから……。こんなもの貰っても、私は外へ出られないし……！」

「・・・外へ出られるわ。・・・私が何とかするから」  
「何とか・・・って」

突然そんな言葉が出てきたから、一瞬驚いた。そうして呆れ、根拠のない自信だ、そう言い返そうとした時、姉の目は先ほどまでのそれとは違う、とても強いものに変わっていたから――。  
だから、急に怖くなる。

「・・・おねえ・・・ちゃん？」

湧き上がる不安に、思わず姉の名前を呼ぶと、姉はみるみるうちに柔らかな表情に戻り、にっこり笑った。

「大丈夫、心配しなくても当てはちゃんとあるのよvこつちにはちゃんと強い味方がいるんだから・・・v」

ただ自分を安心させるために咄嗟にいった強がりか、はたまた本当に自信があるのか。それは自分には全然わからなくて、不安でいっぱいになる。あつたとしても、無理をしていないか。自分以上に危険なことをしていないだろうか。

私は姉の表情の変化を逃さぬよう、じっと見つめていた。

「私ね、あなたに外の世界のことをいっぱい知ってもらいたい。17年間、ほとんど組織の中で育てられたあなたのことから、きつと今外へ放り出されても何もわからないでしょうね。だからこそ早くあなたに知ってもらいたい。どんなに人は優しい、温かい生き物か、どんなに自然は素晴らしいか、どんなに生命は脆く、けれど強いものなのか・・・。沢山のものに接してもらいたい。そうして、感じてほしい。・・・そしていつか、これからのあなたの人生を、この中に一枚一枚、おさめてほしい」

「え・・・？」

「私がこの数年間このカメラに収めてきたように。沢山の大切な思い出をおさめてきたように、今度は志保、あなたが」

「待つて・・・おねえちゃんは？」

「え？」

私が再びそう遮ったとき、姉はきょとんとして私をまじまじと見つめていた。まさかそう来るとは思わなかったらしい。

「思い出を積み重ねるのはおねえちゃんも一緒じゃない・・・私が貰ったら、おねえちゃんはどうするの？結婚も、出産も、これで収めるんじゃないの？これは、昔も今も、その先も、ずっと永遠にお姉ちゃんのカメラよ。お姉ちゃんが汗水流して働いた結果のもの。沢山の思い出の詰まったもの。そんな大切なものを、私が受け取ることができないわ・・・」

「そう・・・」

困ったわね・・・そう言いたげに思案する姉に対して、私は口をずっと一文字にして、彼女を睨んでいた。

ホントは怖かった。だからどうしても食いだらないわけにはいかなかった。

何故、姉がこんな大切なものを私に上げるのか。

『私が何とかするから・・・』

そう姉が呟いたことで、俄か怖くなったのだ。  
若しかしたら、姉は私を残して一人組織と戦う気ではいるのではないかと。

だから、私にもう必要のなくなってしまうそれを私に譲るつもり

なのではないか、と。

自分の代わりに沢山の思い出を作ってほしいという気持ちがあるのではないのか、と。

不安でたまらなくなるのだ。

受け取ってはいけない、そう頭のどこか誰かが警告しているようで、不安でたまらなくなるのだ。  
怖くて、しかたなくなるのだ。

「じゃあ・・・これはどう？」

「え？」

「そのカメラはあなたに『あげる』んじゃない。『貸す』の。『預ける』の。それでどう？」

その言葉の真意がわからずに、私は姉が次の言葉を口にするのを待っていた。

「・・・好きな人がいるの。・・・あなたは知っているわよね」

「ええ。・・・諸星・・・さん、だったかしら」

「ええ。・・・その人と、いつかは結婚したいと思ってる。彼はどうか知らないけど、私はそうなることを信じてるの」

先ほどまでとは違う、また凜とした表情で。そうしてぽつと頬を赤らめて。そんな姉の姿に、ちよつとだけほつとする。

「ねえ、志保。・・・このカメラで私のウェディングドレス姿を撮ってちょうだい」

「・・・え？」

びつくりして素つ頓狂な声を上げてしまう。  
私が、どうして？

「・・・その時出会ったどれだけ腕の利くカメラマンより、かけがえのない妹が・・・。たった一人の家族が撮った写真の方が、何十倍も、何百倍も嬉しいもの。だから、あなたが、私を撮って。幸せで幸せで仕方のない！っていうその瞬間を、貴方が収めてよ」

「そんな・・・！責任重大じゃない！」

「・・・でも、私はあなたに写してもらいたいわ。・・・あなたが言っただんじやない。私の幸せな瞬間を、このカメラに残してもらいたいって。だから、それを、あなたに頼みたいの・・・。ダメ？」

上目遣いでチロリと私を見つめる姉。少女のように、自分より幼いんじゃないかというような甘えた瞳をして。

そんな表情に、私はぶつと吹き出した。

・・・降参だ。

「わかったわよ。撮るわよ。おねえちゃんの幸せな写真、しっかり収めてあげる」

「・・・ちゃんと練習しときなさいね。・・・綺麗な姿に撮ってくれなきゃ承知しないんだから」

「わかってるわよ・・・」

急におねえちゃん面して・・・と、ちょっと呆れてみたりして、私はくすりと口元を綻ばせた。

「・・・そうだ。じゃああなたが結婚した時には、今度はおねえちゃんが貴方のウエディングドレス姿撮ってあげるから」

「・・・しないわよ、結婚なんて」

「あら。夢がないのねえ・・・」

困ったように大袈裟に肩をすくめて見せて、それからそつと小指を私の目の前に差し出した。

「？」

「指きり。お互いの結婚式で、この世で一番幸せだって顔の互いの瞬間を、このカメラでちゃんと収めるっていう・・・」

「・・・う、うん」

「約束、ね」

その白い小指が、また少し私の胸元に近づいた。私もそつと小指を差し出す。

そつして繋がれた指きり。

指切りをしたことで、心のどこかがほんわかして。

この指きりが、約束が、私の先ほどまでの不安を全て、吹き飛ばしていた。

約束は果たせられると、信じていた。

『約束、ね』

姉の声が、もう1度大きく頭の中で響き、哀は回想を終えた。

目を開ければ、あんなに色鮮やかに浮かんでいた喫茶店も、優しい姉の笑顔もすっかり消えていつものリビングに戻っていた。

こんなにくっきりと、まるでドラマを再生させたみたいに、頭の中に浮かびあがったのはいつ振りだろう。もしかしたら、今までになかったかもしれない。

目を開ければ、すぐ前には姉ではなく、思い出のカメラを手にした赤井がいて……。そうして、自分は更なる変化を知る。

「……懐かしい？」

無意識に、彼にもう一度同じことを訊ねていた。



誰にも、教える筈がなかった。

思い出は、自分の胸だけにしまっておくつもりだった。博士にも、彼にも言ったことがないのに。

なのに、何故だろう。どうして、目の前のこの人に言いたくなるんだろう。

姉との思い出を語りたくなるのだろう。あんなに、話しかけることもできなかったのに。同じ空間にいるだけで、精一杯だったというのに。

どうして……。

どうして、こんなに渴望しているのだろう。  
この人じゃなきゃ、ダメなのだろう。

「ねえ」

けれど、本当はすぐに解っていた。

自分の知らない思い出を、彼は姉と作っているから。このカメラで、沢山の思い出を撮り続けてきたと思うから。

自分の知らない姉の姿を、彼はいつでも隣で見続けていたと思うから。姉の悲しみも、喜びも、悩みも全て見続けてきたと思うから。

知りたかった。姉との思い出を、姉の素顔を。  
伝えたかった。姉との約束を、姉の願望を。

彼に、彼だけに。

ほんの一瞬の、たとえ短い期間だったとしても、誰よりも近くでいられた彼だけに。

姉との思い出を、沢山、沢山語りたかった。

「ああ。・・・そうだ、な」

ふ、と赤井の口元が笑う。哀はじつとその表情を見つめていた。

「・・・どこにしまわれたか知らないけれど、1枚だけ、あなたとおねえちゃんと一緒に映っている写真。・・・以前見せてもらったことがあるわ」

「・・・そうか」

「写真、嫌いなのか？」

「用心していただけた・・・。それに、他にも何枚か撮ったはずだが・・・」

「ふうん・・・」

羨ましい。

俄かにそんな感情がぽつと沸いて出たことにちよつと驚いて、苦笑する。

写真を姉と撮りたかったわけではない。そもそも、あのころは確かに写真を撮ることは苦手だった。

街へ出たときにプリクラと一緒に撮ろうと誘われたこともある。

しかし、それを断ったのは間違いなく自分だ。

けれど、自分の知らない姉の素顔を知っている、姉との思い出を作っている彼がとても羨ましくなったのだ。

「ねえ」

哀はそんな感情を抑え、ゆっくりとこう訊ねる。

「どうしてこれを私が持っているか、訊かないの？」

「え？」

意表を突かれた質問だったのか、彼はぴくりと反応した。そうしてまたいつものクールな表情に戻る。

「明美が……。君の姉さんが君に渡したんだろう？ある日を境にぱたりとそいつを持ってこなかったからな。一度どこにやったか訊いたら、『出張中』とか嬉しそうに言っていたから。大体予想はあった」

「そう」

はしゃぐ姉の表情。そうして、それを愛おしそうに見つめる赤井の姿。

なんだが、ありありと頭の中に浮かんでみえて。志保は自然にそれを口にした。

「……約束、していたの」

「……約束？……明美と？」

「ええ」

こくり、頷く。

「姉と。……お互いのウェディング・ドレス姿を撮ろう、って」「ウェディング・ドレス姿？」

「ええ。お互いの結婚式で、この世で一番幸せだつて顔のお互いの瞬間を、このカメラでちゃんと収めるっていう約束。その前に、ちゃんと練習しておくようにって、姉に宿題を出されたの。・・・姉の思惑ではそういう口実をつけることで、私がカメラを持って沢山の場所に行っているんなものと触れあうことができるって思ってただろうけどね。・・・言っていたもの。これからのあなたの人生を、この中に一枚一枚、おさめてほしいって」

「そう・・・か」

哀の言葉に、赤井は嬉しそうに笑った。こんなに優しく笑うのを見たのは哀にとって初めてで。

名探偵の彼と話すときもこんな表情で笑ったことはなかった。

この表情に向けられるのは一人だけ。・・・姉を想つてのことなのだ。

「だから、私はそれを拒んだの。そんなの受け取れないって。私じゃなく、これはおねえちゃんの人生を写すカメラであつて私の人生を写すカメラじゃないから」

饒舌だ。非常に饒舌。

こんなに自分の過去を、姉との思い出を第3者に語る日が来ようとは、自分でも思つてもみなかった。

けれど目の前の彼は、それでも穏やかな表情で黙って傾聴してくれている。

同じ人物を想つて、聞いてくれている。

非常に気持ち良になつていた。嬉しかった。

「だからそれを提案したのか」

「そう・・・でも、叶わなかった。叶うことなく、おねえちゃん、逝ってしまった。私を置いて」

穏やかな彼の表情が一気に凍りつく。そうして、深い溜息をひとつ、吐いた。

「・・・すまなかった。私と出会わなければ、あいつは・・・。君の姉さんは死ななくて済んだのに」

はっとして哀は赤井を凝視する。一見すると表情は変わっていないように見える。けれど、耐えていることは、彼女には十分すぎるほど

わかっていた。そうしてふるふると首を振る。

「違うわ。・・・あなたと出会って、よかったのよ。おねえちゃんは」

諸星大という男と出会ってからは、姉は変わったと思う。

会えばいつも自分の心配ばかりしていた姉が、いつも強がって、何も悩みなんてない、みたいな表情を続けていたような姉が、いつのまにか、少しずつ姉自身のことを語るようになってきて。その話の中には必ず『大クン』という人物がいて。

姉から彼を介されたとき、とっても恥ずかしそうに、照れたように笑ったその表情は、姉ではない、『乙女』の顔をしていて。

心から笑ったり、はしゃいだりできるようになっていて・・・。

そうして、今、目の前にあるカメラはいつも2人の傍にいた。

だから、きつと。

「ねえ、・・・そのカメラ。あなたにあげるわ」

「・・・え」

唐突に言われたその提案に、赤井は驚いたような表情で志保を見つめていた。

「・・・約束は果たすことができなかったんだし、私には必要はないわ。名残惜しいけど、でも、私よりあなたの方が、このカメラに思いいれがあると思うの。姉との思い出、沢山写したんでしょう？このカメラと共に、いろんな場所を回ってきたのでしょ？」

『約束、ね』

出された指きり。

でも、果たせなかった。

叶わなかった思い出は、見ているだけで辛くなる。

目の前の彼は、このカメラでどんな幸せな瞬間を撮り続けてきたのだろう。見続けてきたのだろう。

その瞬間を、私は、知らない。

ほろり、涙が零れそうになって。志保は慌ててそれを飲み込み、目を瞑る。

塩辛い、味がした。

「私は受け取らない。気持ちだけ受け取っておくが、私にはそれを受け取る権利はないよ」

その声に、はっと目を開け、彼を凝視した。目の前の彼は、とっ

ても涼しい顔をしていた。

「どうして？あなたにとって、これは、大切な」

「ああ。大切なものだ。・・・しかしどんなに大切だと私が思っている、これは明美が君に託したものだ」

「・・・託した、もの？」

言っている意図がわからず、私は唾を飲み込む。

「・・・約束したんじゃないのか？指きり、したんじゃないのか？」

「でも、果たせなかったわ」

「約束は一つじゃないよ。・・・あいつの願いはそれだけじゃない。言っただろ、明美は。君にこのカメラでいろんな思い出を作ってほしいと。その願いを無視するのか？出された指きりを君は振り払うのか？」

「っ・・・！」

涙が再びこみ上げてきそう。私は思わず顔を覆った。

「・・・あいつは、ココにいる」

彼の長い人差し指が、カメラを指した。

「明美に会いたかったら、いつでも見に行くよ。・・・そうだな、そうして結婚式のときは明美の代わりに君を映そう。明美もきっとそう望んでいた筈だから・・・。それとも、私じゃ不満かな？」

彼の表情がにやりと笑ったように見えた。けれども、確かじゃなかった。・・・なぜなら、涙で、視界がよく、見えなかったから。



「君と明美の約束は、今もずっと、続いてるよ」

『私がこの数年間このカメラに収めてきたように。沢山の大切な思い出をおさめてきたように、今度は志保、あなたが』

『・・・そうだ。じゃああなたが結婚した時には、今度はおねえちゃんが貴方のウェディングドレス姿撮ってあげるから』

『約束、ね』

姉との指きり。

『約束、ね』

その言葉と、姉のくしゃつと笑うその表情。  
何度も、何度も甦り、消える。そうして私は心の中で、決意した。

「おねえちゃん、きっと、叶えるよ」

もう、出された指きりは、  
振り払わない。

## エピローグ

カランコロンとチャペルに響き渡る鐘の音。

心に染み入るパイプオルガンの奏でるウェディングマーチ。

晴れて神の前で夫婦と認められ、バージンロードを花嫁は花婿の頼もしい腕にそっと腕を絡め、ゆっくりと、ゆっくりと歩き進む。

参列者から「おめでとう」という祝福の声と、新郎新婦のシャッターチャンスを切ろうと続く、カメラの音。

その中でまた聴こえる。ぱしゃりぱしゃり、とあの懐かしい音だ。それは花嫁の大切な姉の形見のライカのアナログのカメラ。そして、それを写しているのは、亡き姉の大切なヒト。

花嫁は――宮野志保は、そのカメラを抱えた人物、赤井秀一を見つけた瞬間、再び全身にぐっとこみ上げるものを感じていた。

彼だ。

いけない。・・・また、涙腺が緩んでしまう。

いったい、どれだけ泣いただろう。

いったい、どれだけ、笑っただろう。

いったい、どれだけ”幸せ”を感じただろう。

このほんの数十分間の間で、数え切れない沢山の幸せを、姉の大切にしていたカメラに、大切にしていた彼の手によって収められた。

『結婚式のときは明美の代わりに君を写そう。明美もきつとそう望んでいた筈だから・・・』

あの日、そう言ってくれた彼の言葉を、姉は天国で聞いていただろうか。

志保は再び、あの日の姉の言葉を心の中で反芻する。

『好きな人がいるの』

『その人と、いつかは結婚したいと思ってる。彼はどうか知らないけど、私はそうなることを信じてるの』

あの時言った姉の言葉。

きつと、きつと彼もまた、同じように思っていただろう。

姉と同じように、一緒になりたいと思っていただろう。

いや、志保自身そう確信していた。

だって、あの時、カメラを手にして、じつとそれを見続けていた彼の瞳は、とっても優しくかったから。

自分の姉の思い出話に耳を傾けるその姿勢は、とても柔らかかったから。

そして、何より・・・。

何より、こうして、姉の代わりに約束を果たしてくれているから。死んでも尚、姉の気持ちになって考えてくれているから。

あの日以来、2人になって姉との思い出話をお互い語るというわけではなかったし、それ以前にあまり志保の前には現れることがなかったように思う。だからこそ余計に嬉しいのだ。

ばしゃり。

また、音がする。

彼は、赤井は知らないだろう。

今、志保が何を考えていたか。何を考えて幸せだと感じたか――。

結婚式に約束を果たせたことだけで喜んでいるのではないということをおそらく、彼は気づいていないだろう。

ただ、一つだけ彼もまた知っている。

今、自分が一番幸せだということ。

この世で一番最高だ！って思っていること。

きつと目に見えて解っているから。

どんなに今の自分は涙で化粧も剥がれ落ち、ぐしゃぐしゃな顔でも、きつと今まで生きていた中で一番とおきの顔をしていると思うから。

赤井がこうしてここに居るだけで、姉の代わりに約束を果たすことで、自分が今一番幸せと感じているから。たとえそれが半分だけしか叶わない約束だとしても。

『嬉しい』よりも、『ありがとう』という大きな感謝の言葉。

本当は姉自身に来てもらいたかったけれど、生きて一緒に祝ってもらいたかったけれど、それでもこうしているだけで、きつと姉もまた天国で喜んでいると思うから。

自分の代わりに、大好きな彼が妹の結婚式で役目を果たすことをちょっと驚きながらも、心から彼に感謝していると思うから。

本当は自分自身、彼と結婚式を挙げたかったに違いない。

そうしてきつとその幸せな姿を妹に、1枚でもそのカメラに残して約束を守りたかったに違いない。

けれど、こうして死んでも尚愛され、そうして姉の分身を抱え、妹の晴れ姿をカメラに収めている姿を見て、きつと心の底から喜んでるように思うから。

・・・いや、もしかしたら姉はずっと傍で見ていたのかもしれない。姿は見えないけれど、天国じゃなくて。きつとこの会場のどこかに、赤井の傍にいたのかもしれない。そうして、一緒にカメラで志保を、写していたのかもしれない。

『なんだかウェディングケーキ・カットみたいね』なんて言いながらきつとすぐ近くで笑っているかもしれない。そうやって一人満足しているかもしれない。

「ねえ、そうでしょ。おねえちゃん」

志保は姿の見えない姉に向かって、心の中で問いかけた。

『指きり。お互いの結婚式で、この世で一番幸せだって顔のお互いの瞬間を、このカメラでちゃんと収めるっていう・・・』

『う、うん』

『約束、ね』

あの時の約束が。

一生叶わないと思っていた約束が今こうして、果たされた。

それは随分変化球だったけど、半分も守られていないかもしれないけど、それでも志保は幸せだった。ずっとずっと。

式が始まる前よりも、何倍もの幸せを、彼に貰っていた。

「志保、何そんな顔して」

「え？そんな顔ってどんな・・・」

「さっきからずっとぽーっと赤井さんのとこばかり向いて、こっち見てくれないから何考えてんのかなって思ってた」

「あら、妬いてるの」

「別に・・・」

拗ねたのか、むすつとした表情でそっぽを向く花婿に、志保はクスクスと小さく笑った。

ぱしゃり。



また一つ、思い出の写真が増えた。

< f i n . >

## エピローグ（後書き）

一部加筆修正しました。後半ちょっとじっくり来なかったから。

2008年宮野の日にぐりりんことコラボさせてもらったお話です。ぐりこさんからコラボの話が10万打以来久しぶりに来て、すごく嬉しかったことを覚えています。イラストを見せてもらって。その後、会議。

何の約束か。

好きな人ができたら一番先に教える約束？

それとも、組織を抜けたらどこかへ行こうという約束？

考えれば考えるほど、どうしてもありふれたものしか浮かばなくてさあ、どうしたらいいんだろうと思ったときにパツと浮かんだのが、カメラでした。

これもありふれたものなのかもしれないけど、それでも次々と浮かんできて。

赤井さんを登場させたい。明美さんと赤井さんとの思い出も書きたい。

けれど、赤井さんと、志保さん（あるいは哀ちゃん）との交流も書きたい。

そして、明美さんの代わりとして赤井さんが、志保さんの約束を叶えてあげることができたら・・・。

そんなことが急にモリモリ浮かんできて、ぐりりんも採用してくれて。

時間がかかったけれど、何とか完成しました。

さて、製作秘話はここまでにして。

・・・志保ちゃんの結婚相手、一体誰だと思います？

新ちゃんかな？みったんかな？それとも、別の誰かな？

それは、読む人の想像にお任せします（笑）。

ちなみにもちろん、私のイメージする相手は・・・（笑）

それでは、ここまでお読みしていただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5579/>

---

約束

2010年10月11日08時14分発行